

2005年4月

世界が尊敬した日本人④

最長寿 120 歳を生きた泉重千代

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

日本は世界一の長寿国である。平均寿命は女 85.6 歳、男 78.6 歳、で、この 10 年間、女性は世界一を続けている。厚生労働省の調べでは、05 年九月の敬老の日で 100 歳を超えた人は約 2 万 5 600 人。半世紀前は百歳以上は二百八十一人だったので、これこそ 100 倍近いのびである。90 歳以上は 100 万人を上回る。

高齢少子化問題がやかましが、高齢者といわれる 65 歳以上の人口は 2556 万人(男性 1081 万人、女性 1475 万人)で、総人口に占める割合は 20.0%、国民の 5 人に 1 人が 65 歳以上という勘定だ。

長寿の中身をさらにみってみると、現在、八十歳以上の人たちがあと何年長生きできるかを予測する国際比較では、先進国のなかで日本は米国やドイツ、フランスよりも下になる。日本人の百歳以上では寝たきりが三分の二にのぼるが、米国では圧倒的に自立して、元気な百寿者が多いといった違いがある。

死ぬまで、元気で自立した長寿者こそ人間としていちばん幸せなことである。

世界の長寿者のなかでもっとも有名なのは、一六三五年に百五十二歳九カ月で死んだといわれるイギリスのトーマス・パーであろう。ウイスキーの『オールド・パー』のレッテルにその肖像残されている。トーマス・パーは面白い人物で、八十歳ではじめて結婚し、さらに百二十二歳のときに十七歳の少女と再婚して子供をもうけたといわれる精力絶倫ぶり。晩年は“オールド・パー”の愛称で親しまれ、あの銘酒の名につけられた。

パーが死んだのは国王チャールズ一世に招待された際の食べすぎが原因といわれる。パーの遺体は解剖した結果、心臓などの器管は全く衰えておらず、骨密度も二十歳代とかわらないという若さで、生殖腺(セックス)もほとんど萎縮していなかったというから驚きだ。

ただ、当時、戸籍登録が正確残された時代ではないだけに、152 歳をそのまま信じるわけにはいかない。

日本での世界最高齢は泉重千代である。ギネスブック 1980 年版は 115 歳の泉を世界一とした。泉は慶応元年(1865)6月、鹿児島県徳之島に生まれた。若い時はサトウキビ畑で働き、70 歳代になっても島の往復船の沖中士の仕事をやり、砂糖の入った樽(重量 70 キロ)を運ぶ重労働の仕事をこなしていた。

100 歳になっても肩や脚の筋肉は衰えず、自宅の畑で農作物を作り、元気で働き、114 歳になってもサトウキビの葉落としの作業を手伝っていた。

記憶力は確かで、言葉もしっかりしており、山道など息切れすることなく元気に歩き回り、医者やマスコミ関係者が尋ねてくると、一緒に泡盛をのんで、島歌を最後まで歌詞を忘れずに歌って、その元気が記事になっている。

その長寿健康の秘訣は、長年の重労働の基礎とした体力、それにサツマイモが主食で大豆、野菜、魚、海藻類が中心の、豚肉などは年に何度も食べられない粗食といってよい食事。それから何といてもサンゴでできた島のカルシウム、ミネラルをたくさん含んだ水を飲み続けていたことではないかと、みる研究者が多い。

サンゴを含んだ水にはガン、心臓病などの予防効果があるとも言われている。そのせいか、徳之島は泉さんだけではなく全島民 3 万 4000 人の中で、百歳以上が 78 人、九〇歳以上が 300 人近くいる日本でも有数の長寿の島である。

「お天道様と人間は、縄で結ばれている。その縄が切れた時が人間の死じゃ」と新聞のインタビューに泉さんは答えている。1985 年 6 月、還暦を 2 回迎えたという「大還暦」(120 歳)の盛大な祝賀パーティーが徳之島伊仙小学校の体育館で開催された。

この時の泉のインタビューが傑作。

長寿の秘訣はと聞かれ、「酒と女かのお。(酒は) 黒糖ショウチューを薄めて飲むんじや」「(女性のタイプは)「やっぱり、年上の女かのお。」の答えには場内大爆笑がおこった。それから半年後、120 歳 6ヶ月という大長寿で亡くなった。

禁無断転載